

# 平成27年度 学校評価総括表

教育目標		基礎学力及び進路目標に応じた学力の向上、たくましい体力と強靱な精神力の育成、規範意識の向上と社会性の醸成を目指すとともに、人権を尊重する民主的な社会の創造に努める人間の育成を目指す。			総合評価	
運営方針		生徒の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる。				
平成26年度の成果と課題		本年度重点目標	具体的目標			
キャリア教育の視点から教育活動全般を見直した。基本的生活習慣の定着や規範意識の向上については、一定の成果はみられるが今後も引き続き「挨拶励行、正しい身だしなみ、時間厳守」の3項目について重点的に取り組む必要がある。また、学習面においては、教員の授業力向上を図り、生徒の学習意欲向上に努めるとともに、計画的に生徒の学力向上や検定取得に向けた取組を深め、生徒が主体的に進路決定できる体制の整備に努める。		自らの進路を主体的に選択し、自らの努力で進路先を決定できる生徒の育成を目指す。	基礎学力の充実と学習意欲の向上			B
			規範意識や社会性の向上			
			体力・精神力の向上			
評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 および改善方策
学習指導	①基礎学力の充実	BasicStudyタイムを継続すると共に、家庭学習習慣を定着させるための課題等を計画的に課し、基礎学力の定着を図る。	B B	・BSタイムそのものや学習に取り組む姿勢は生徒に定着したが、ややマンネリ化の傾向にあり、効果が疑問視される。 ・課題の提出率はよいが、それが家庭学習習慣や基礎学力の定着に繋がっているとは言いがたい。	・BSタイム設置の趣旨や意義を生徒・教員ともに再確認し、共有する。また、生徒の学習意欲を上げるために、定期考査時以外の確認テストや補習などを行う。 ・復習型の課題を各教科で工夫し、小テストと連動させる。	
	②授業力の向上	年2回の公開授業並びに研究協議を実施することで、授業力の向上を図ると共に、観点別評価の在り方を模索する。	C	各教科とも、公開授業は行われたが、見学者が少なく、授業後の研究協議も不十分な教科が大半だったため、授業改善にまでは至っていない。	・観点別評価にテーマを限定して授業を行うとともに、全体での研究協議の場を設定する。 ・公開授業実践者の数を増やす。	
生活指導	①礼法・マナー・身だしなみに対する意識の向上	登下校・授業の始業と終業時等を通じて挨拶や言葉遣い・身だしなみ等に対する生徒の意識の向上を図る。	B C	・挨拶や言葉遣いは、自らできる生徒とそうでない生徒がいる。身だしなみは多くの生徒が気をつけているといえるが、一部意識の低い生徒が見られる。 ・遅刻については、不注意や寝坊といった理由の他、体調不良や通院等も多く見られ、500を下回ることができなかった。時間だけでなく体調管理も含めた自己管理ができる必要がある。	・挨拶運動等は効果的であったので、こうした活動を通じて、自分からよい挨拶をしようという一歩深めていく取組を進めていく。 ・遅刻を繰り返す生徒がいると学級全体への影響も出てくるため繰り返す生徒への指導や支援策を考える。	登下校時のマナーは向上しているものの、ケータイを使いながらの歩行が目立つ。SNSの使い方も含め、マナー指導が必要である。
	②基本的生活習慣の確立	正しい生活習慣を身につけることから、遅刻や欠席・早退を減らす。特に遅刻については年間500以下を目標とし、時間を守る意識の向上も図る。	C			
進路指導	①進路先の開拓	企業訪問を30社以上行い、求人依頼状を120社以上に発送し、求人の依頼と情報収集に努める。	A B	新規あるいは久々に求人をお願いした企業があり、取組の成果が一定あった。今後は、企業との信頼関係をより深めていきたい。	特に、指定校求人をお願いしている企業への訪問を優先するなどして、信頼関係を深めていく。	
	②多様な進学入試方法の活用	多様な入試方法であるAO入試、専門学科推薦入試等の合格者を増やす。目標20名以上。	C	専門学校を含めると目標値を越えるが、四年制大学に限ると受験者20名、合格者14名であった。	専門学科推薦等の出願条件を有する生徒数を増やす取組(生徒への動機付けなど)を行う。	
人権教育	SNSにかかわる人権問題の意識の向上を図る。	SNSにかかわる人権問題を人権HR年間計画に位置づけ、HR指導案を作成し、HRを行う。また、生徒指導部と連携して、取組む。	B	指導案を作成し、ラインにおける実際のやりとりや、その危険性について展開したが、生徒の理解にいたらず、生徒間でSNSにかかわる事象が起き、対応した。	展開内容をさらに充実したものに、外部講師等を招聘することも考えられる。	
	生徒個々の問題意識の共有	夏期休業中の課題の人権作文を基に、指導案作成し、人権作文放送学習会を実施する。	A B	今回シッティングハレーをテーマとしたので、体験型の学習を行った。ハレーの選手に実際に来ていただいて、実演してもらった。最初の段階では、生徒にとって選手はやはり、障害者であったと思うが、実演を行う中で、当たり前前のハレーボール選手、スポーツ選手になっていた。体験する生徒も、実演を見学する生徒もハレーを楽しんでいた。	可能ならば、各年のテーマにそって今後も体験的な学習を計画したい。	

文化活動	①図書館活動の充実	親しみやすく魅力的な図書室作りに努め、1日の利用者40名以上を目指す。	B	回転式書架を新たに1台設置。図書委員会で作成した本の紹介POPを展示した。12月までの1日平均入館者数23.5人	生徒の興味・関心をひく読書イベント等を企画し、図書館利用の活性化をはかる。	多くの人に学校や生徒を見てもらう機会を増やすことで、学校の宣伝にもつながる。 ・地域や図書館などの連携 ・体育大会・文化祭などの公開 ・販売実習など
	②文化祭の充実・向上	生徒会・学年・文化部との連携を密にしながら、全校体制で文化祭実施にあたる。	B	展示・舞台発表・模擬店・生徒会行事等、充実した内容で実施することができた。文化委員からの積極的な案も多数出ようになったので、来年度につなげたい。	文化祭2日目、2年生が能動的に参加出来る行事を、考えたい。	
体育活動・健康教育	①体力の向上と部活動の活性化。	授業内容の工夫。運動部への加入率の向上(目標30%以上)。新体カテストで県平均を上回る(3種目以上)。	B	1年男子以外は新体カテストで3種目以上県平均を上回ることができた。	新体カテストでTスコア30点台の種目が0になるようトレーニング方法を工夫する。	
	②保健指導の推進。	保健便りの内容の充実。	B	発行回数が不十分であった。保健便りではなく掲示物等で必要な情報を発信した。	保健便り以外の方法での保健指導も充実させていく。	
	③食育の充実。	朝食摂取率を向上(目標70%以上)させ、食を通して健康への意識を高める。	B	朝食摂取率が69.4%に向上した。	70%を越せるよう継続して取り組みたい。	
環境整備活動	①環境美化に対する意識を高め、社会性を身に付ける。	清掃活動の取組向上や、ゴミの分別の徹底を図る。	B	一時期トイレの汚れが目立った。校外清掃活動も同じだが汚すものと綺麗にするものが同じ高校に在籍している現状がある。	トイレの汚れについてHR展開すると改善の傾向が見られた。おりに触れて訴えかける指導を継続する。	
	②安全確保及び防災の重要性を認識させる。	実践的な防災訓練を企画・実施する。	B	初めて体育館からの全校避難を実施したがスムーズに避難することが出来た。	様々な場合を想定して訓練を実施し、"備えあれば憂いなし"を実感させる。	
会計ビジネス科	資格・検定取得の向上	検定合格への意識を高め、全商簿記2級合格者(1年時)学科40人 全商簿記1級取得者学科20人を目標に学習指導する。	C	C	全商簿記1級の取得者数の目標は達成したが、全商簿記2級(1年時)の合格者数は目標の半数であった。	次年度入学の1年生の受検級や指導法等を考える。また、現1年生の2年時での指導法や指導体制も考える。
流通ビジネス科	①検定合格率の向上	商業経済検定1級合格者数20名を目標として、検定直前補習の実施や、合格点に満たない生徒への個別補習の実施。	B	B	2級マーケティングにおいて、昨年85名受験11名合格だったのが、76名受験26名合格となった。昨年度1級合格9名であったが、本年度18名であった。目標の20名には及ばなかったが、2年間かけて検定取得の意識を高めてきた一定の効果はあった。	チェーン等では合理化のためマニュアル化された顧客対応であるが、商業教育としては、コミュニケーション能力を身に付け状況に応じて対応できる人材育成を目標とすべきである。
	②起業精神育成プログラム2年目の取組充実	流通ビジネス科2年生を中心に全体体制で模擬株式会社を設立・運営し、初年度より利益の計上をめざす。	B	B	昨年より様々な面で生徒の成長を感じることが出来た。特に3年生の販売実習について準備から販売当日まで良く取り組めた。	
情報ビジネス科	資格・検定取得の向上	自らの進路を実現することを目標に、全商情報処理検定1級などの上位資格の合格者を前年度の5%増しにする。	B	B	今年度は、全商情報処理検定1級に10人が合格し、合格者数で、前年度比10%増しとなった。	各学年の検定取得目標を設定し、生徒が意欲を持って取り組めるよう、授業の充実を図る。
総合情報科	新学習指導要領の趣旨の実現をめざした学習指導の実践	昨年に引き続き、アクティブ・ラーニングの積極的導入など、指導方法の改善に努め、指定研究の成果としてまとめる。	B	B	1年生の基礎科目で、アクティブ・ラーニングの導入など指導方法の改善について一定の成果が得られた。	指導方法の改善をさらに進めるため、新しい教材開発や3年間の学習計画を見通した指導方法の改善に取り組む。

A: 十分である  
B: ほぼ十分である  
C: あまり十分でない